

電子情報環境下における大学図書館機能：近未来への展望

--ウォレン・ホルダー氏特別講演会--

主催：科学研究費補助金「電子情報環境下における大学図書館機能の再検討」研究グループ
後援：CSA ジャパン

2006年9月19日(火)午後2時から4時30分

六本木ヒルズ森タワー49F アカデミーヒルズ内 カンファレンスルーム 3+4

プログラム

2:00PM-3:00PM 講演「Scholarly Portal: Setting Future Directions」

ウォレン・ホルダー氏(トロント大学図書館)

3:00PM-3:20PM 講演「早稲田大学におけるデジタルリソースにかかわる取り組み」

今村昭一氏(早稲田大学図書館)

3:30PM-4:30PM 討論

司会 土屋俊(「電子情報環境下における大学図書館機能の再検討」研究代表者・千葉大学教授)

〈土屋(司会)〉

今日はお忙しいところありがとうございました。急にトロント大学の Warren Holder さんがみえることになったので、CSA の方に色々お手伝いいただいて、こういう非常に集まりやすい場所で席を設定することができましたので、最初に CSA の方に感謝したいと思います。われわれの方は、色々なところでごちゃごちゃしゃべっている人たちがたくさん後で出ますので、特に紹介する必要もないと思いますが、プログラムの下の方に書いたような形で研究活動をしているということです。その内容の一端くらいは、質問の中で出せるかと思っています。Holder さんのご紹介に関しましては、それもプログラムに書いてある通りというか、それよりもあまり細かいことを知らないの、その通りということです。基本的には、彼とは4、5年ほどの付き合いになるのですが、彼がネクタイをしているのを見たのは初めてで、先ほどからかいましたところ、皆さんに対する尊敬の念からしてきたのであるという風に、ちゃんと理由がついているようであります。基本的に非常にカジュアルな会話を好むということですので、時間がちょっと限られているので申し訳ないですが、できるだけ気軽にご質問していただきたいと思います。ただし、時間が限られていますので、前半にお話を伺う間はとりあえず聞くだけということにして、最後1時間ほど取ってありますが、名前をたくさん並べてありますけれども、この方々も質問する気で意欲があるのですが、押しのけてどんどんフロアの方で質問あればしていただくという感じでできるだけあまり堅苦しくなくやりたいと思いますのでよろしく願います。それから今日は、基本的に英語の発言に関しては日本語の翻訳をつけるという形にしたいと思います。日本語の発言は通訳の方に囁きかけていただくという形で対応しますが、もしも、時間が足りないとかということで、どうしても自分の英語のほう伝わりやすいとお考えの方は直接英語で話していただいて、それを日本語に翻訳してもらうという手もあるということをおし添えておきたいと思います。余計なことを喋りだすと3時間くらいずっと喋ってしまうのでやめます。

〈Holder〉

1. はじめに

どのように紹介されたのか今ひとつ定かではないのですが、本日はこのようにお話しする機会をいただき

まして、この場にいられることを大変うれしくまた榮譽に感じております。土屋先生とはさまざまな国際会議でご一緒してお話をする機会があり、将来の図書館の方向性については同じような考え方を持っているのではないかと感じております。今回アジアに来る機会がありました。香港大学で木曜日からイベントが始まるのですが、100万タイトルの電子ブックを収集しているということで、その関連のイベントに招かれており、この機会を利用して来日しました。電子ブックは、現在私が非常に興味を持っている分野でありまして、今後、電子ジャーナルに加え、さまざまな索引／抄録サービスに盛り込んでいければと考えております。

私は普段はネクタイをしないのですが、今回は皆さんに対する尊敬の念をあらわすという意味で、ネクタイをつけて参りました。このようなプレゼンテーションの機会をいただく際いつも気になっているのが、トロント大学でのやり方が一番正しいやり方だと受け取られてしまっては困るなということです。私たちが考えている図書館の将来のあるべき姿はこういう考えであるということをお話して、そしてそれが皆さんにとって少しでも参考になれば幸いです。

もうひとつ導入の一部としてコメントしておきたいのですが、現在、図書館というフィールドは非常にエキサイティングな時代であると思っています。トロント大学は慶應義塾大学と非常に緊密な関係を持っており、これまでに3人の図書館員がトロント大学で研修する機会を得ました。今朝の午前中も慶應義塾大学を訪問してきました。

私自身、26年間図書館員として勤務してきましたが、過去6年間にやってきたこと見てきたことが一番エキサイティングだったと思っています。現在起こっているさまざまな変化、そして、ユーザにどのように情報を提供していくか、私たちのやり方次第でいろいろと変えていけると感じています。あまりドラマチックに受け止めてほしくはないのですが、言ってみれば私たちはGoogleやGoogleScholarなどの検索エンジンと競合していると言えます。トロント大学では、ユーザに対して、GoogleやGoogleScholarよりも、学術的な、すばらしい検索エンジンをユーザに対して提供したいと考えています。その検索エンジンを、私たちはScholars Portalと呼んでいます。

2. Scholars Portal の現状

では本題に入ります。このScholars Portalというのは1996年にトロント大学で始まりました。当初は、200のエルゼビアのジャーナルから始まっています。しかし短期間のうちに、オンタリオ州にある残りの19の大学からも関心が示されました。トロント大学でもともとそのサービスの提供や運営をしていたのですが、現在は20の大学全てに対して提供しています。

(1)目標

ここ(スライド2)に書いてあるのが、Scholars Portalの目標です。図書館員にとっては、長期的に電子情報をアーカイブし、それを提供していくことは重要だと考えます。あまりこの点に時間をかけたくはないのですが、Scholars Portalはライト・アーカイブ(light archive)、つまり日常的に使われているデータベースで、これが非常に重要な点ではないかと個人的に思っています。これに対して、ポルテコのような優れた試みがありますがこれはダーク・アーカイブです。もう一つ重要な点は、迅速に検索結果を出すということです。ユーザは迅速な結果の表示を求めていますので、こういったサービスを自分達のコントロールの下に置けば、信頼できるサービス、そして非常に早いレスポンスを返せると思っています。また、自分達のコントロール下に置いておくということで、ユーザからの「こういうことがしたい」という非常に革新的なアイデアに対してもより対応しやすくなっていると感じています。また様々な構成要素からなるポータルを、一つのインターフェイスとして使うということで、様々な研究活動をさらに支援していけると感じています。

(2)期待される成果

ここ(スライド3)に書いてある期待されるインパクトについては、みなさんお馴染みではないかと思えます。皆さんも同じような関心をお持ちではないかと思えます。多くのユーザは自分達のデスクトップから情報にアクセスしたいと考えています。利用状況について調べた結果、図書館の中での利用というのは10%に満たないものでした。最近見た統計では、電子ブックの利用状況について見ると、図書館内でそれを利用し

ているというのは6%に満たないというものです。デスクトップについての考え方は、もしかしたら皆さんとは異なるかもしれませんが、デスクトップから情報にアクセスできるようにすれば、生産性が高まると思っています。そうすることで、研究者達の時間を節約することができます。情報を探すとということではなくて、結果を見いだすことに時間をかけられることになると思うからです。次の項目については、これはコンソーシアムという考え方といっても良いかと思います。様々な大学から構成される図書館のグループで考えた場合、全ての参加大学に対して、同等の信頼できるアクセスが提供されているということ、これが重要な点です。一つの大学が他の大学を助けないといけないということではありません。またわれわれが Google や Yahoo のような検索エンジンと競合していくということであれば、情報の伝達方法についてクリエイティブに考えていく、また新しい方法を考えていく必要があると思います。このように考えますと、伝統的に図書館がはたしてきた機能、すなわち目録作成、蔵書形成、あるいはレファレンスサービスを、もうすこし情報の伝達にシフトさせていく必要があるとも言えると思います。また、政府に予算を請求するような場面では、おそらくみなさんもそうではないかと思いますが、私たちは地球規模で競争力を高めていくのだということを説明する必要があると思います。

(3)資金

コストについてはあまり時間をかけたくないのですが、聞かれることがありますので、このような数字をお見せします(スライド 4)。最初の段階では政府からの助成金を受けました。その際にかかったコストというのはここに表示されている通りです。これについて特にご質問があれば後ほどお答えしますが、ここに書いてある金額は皆さんにとってはわりと大きな金額に見えるかもしれません。ただ 20 の大学で分担するということを考えれば、非常にうまく使われたお金だと感じています。今年になって政府からの助成金がなくなり、各大学がその分を負担すると言ってきた時、まるで信任決議をもらったような感じがしました。それから確認のために申し上げておきたいのですが、ここに書いてあるコストには、電子情報のライセンスにかかるお金は入っておりません。

(4)スタッフ

これ(スライド5)も参考情報なのですが、スタッフのための資金は20の大学から出されています。採用はトロント大学が中心になって行っています。フルタイム換算で 13 人のスタッフが関わっています。ただそうは言っても 20 の大学からのスタッフが何らかの形でボランティアとして時間を使ったり、さまざまな形で関わったりしています。委員会として参加したりですとか、そのプロジェクト全体の管理に関わっています。

(5)サービス

以上が、どちらかといえば官僚的な側面で、ここからが実際の面白い部分、サービスそのものの話になります。はじめにリストという形でご紹介して、その後個別の話をしします。

まず、サイエンスサーバと言うプラットフォーム上に、電子ジャーナルのサービスを展開しています。それから資源共有をささえるために、ILLにあたるものですが、これについてはVDXを使っています。さまざまな索引・抄録データベースについては、Illuminaというプラットフォームに格納しています。それからオープンURLリゾルバも必要ですが、これについてはSFXを使っています。さまざまな書誌、脚注、文献情報管理には、RefWorksを使っています。また、すべての情報をローカルにロードできれば良いのですが、これは夢に過ぎないことですので、マルチサービスという統合検索サービスを使っています。それからコンテンツ管理、ERMIについてはVerdeを使っています。

数字そのものは日々変わってっていますが、ご参考までにこれだけの数の論文ですとか、ジャーナルが格納されているということをご紹介します。また、出版元についても一例をお見せしておきます。我々が Google から学んだように、そこで出しているジャーナル情報を探すのにその出版社のサイトを見に行くというよりも、一つの検索エンジンを使って全ての答えを得たいと思う人が多いので、なるべく多くのジャーナルを一つのインターフェイスで検索できるようにしています。検索については、先ほど申しあげました通り、CSAのIlluminaという製品を使っています。またさらに、ローカルにロードした140以上のデータベースも一緒に検索の対象として使うことができます。Web of Scienceが、Illuminaのプラットフォームにローカルでデータベースをロードさせてくれるということを知った時には驚きました。ただ実験的にやってみたいというこ

とだと思いますが。それから、全てのコンテンツを一つの場所で利用可能な状態にするというのは難しいということはわかっています。私のポストがよく言うことですが、ユーザを行き止まりにさせては駄目だということです。つまり、ユーザが自分の求めている論文が見つけれない、あるいは、自分が探している抄録が見つからないという状態になった時、自動的にILLのサービスを起動できるようにしてあるということです。

こちら(スライド11)が、脚注や参考文献リストのための文献管理に使っているものです。他の製品を使っている教授や学生も多いということはわかっています。ただ、ウェブベースで、クライアントをわざわざダウンロードしなくても良いという点で、RefWorksの方がより優れていると思いますし、私たちはRefWorksのほうが気に入っています。

また、このように様々な部分同士でやりとりができるようにする必要がありますので、SFXを使っています。たとえば書誌情報データベースの中で文献情報を探していて、フルテキストが欲しかった場合、シームレスにフルテキストとリンクが図れるようにしておかないといけませんので、このような形をとっています。同じようにRefWorksの中で、参考文献リストを見ていて、実際のテキストをチェックする必要があるれば、そちらのフルテキストの方に移れるようにしておくということも必要です。おそらくみなさんご存じのように、他にもオープンURLリゾルバというものはありますので、これは、あくまでも一例ということです。

(6)利用実態

こちらのグラフ(スライド13)で示している数字そのものにはあまり意味は無いと思います。ここでお見せしたいのは、Scholars Portalの利用が伸びているということで、Scholars Portalの成功はScholars Portalの利用が毎年伸びているということで裏付けられていると言えるでしょう。今年についても、去年よりは数字が伸びると思っています。これは蛇足ではあるのですが、そのうちこの数字が横這いになるのではないかと考えていました。ただ今のところ、数字は右肩上がりで伸び続けています。そのうち飽和状態に達するのではないかと考えているのですが、今のところその状態にはまだ達していないようです。

こちらのグラフ(スライド14)では2002年からどのように論文数が推移してきたかを表しているものです。月ごとの変化だとかを取り除いて表示してあります。午前中も予算の話についての議論があったのですけれども、このように利用が伸びているということを実際に管理職の人たちに見せることができれば、予算を賢く使っているということを実感づけることができると思います。

こちらのグラフ(スライド15)では、全ての大学が同じではないということを示しています。一番下に示されているのがトロント大学ですが、ある大学は他の大学よりもより多く使っているということです。トロント大学での利用数は全利用数の1/3に迫っています。こちら(スライド16)も数字そのものにあまり意味はありません。出版社によって利用の状況にばらつきがあるということを示しているだけです。一番下のエルゼビアについてはジャーナルの発行数も一番多いです。それから、Scholars Portalに格納してから一番長い時間が経っているということがあります。こちら(スライド17)も、タイトルを一つずつ紹介するということではしませんが、このように利用状況を分析できているということだけをお伝えしたいと思います。これは一番使われているジャーナルのトップ10を表しています。皆さんにとってどの程度ご関心のある事項かはわかりませんが、全ての大学での利用状況を調べてみたところ、もっとも頻繁に使われているジャーナルが全ての大学で同じということはありませんでした。つまり、全ての大学でトップ10のリストに入っているジャーナルは一つも無かったということです。また、117のタイトルは一つの大学でのトップ10のリストにしか入っていなかったということがわかりました。これもビッグディールの価値を示しているものではないかと思っています。ユーザによって求められているコンテンツは違うということです。

またこちら(スライド18)でも、Scholars Portalでの接続の回数と検索の回数が年を追うごとに増えているということを示しています。こちらのグラフ(スライド19)も基本的には同じトレンドを追っているもので、セッションの回数、検索の回数、また別の検索の回数を、3年間でどのように推移したかを追ってみたものです。御覧の通り、非常に伸びています。こちら(スライド20)については、結果に若干驚きました。より多くのコンテンツを提供していますので、ILLのリクエストは減っていくのではないかと考えていました。これは私達が調べてわかったことであり、他の調査でも同じような結果が出ているのですが、情報に対するアクセスをより多く提供すると、もっと多くの情報を求めるようになるということです。これも驚いたことですが、利用者のカテゴリ別に見ると、ILLが一番多く使っているのは学部生でした。個人的には、ILLというのは、大学院生、あるいは教授の方が使うものではないかと思っています(スライド21)。

先ほど一番良く使われているジャーナルは何かというお話をしましたが、こちら(スライド22)が一番良く使われているデータベースは何かを示しているものです。ただ、全てが同じ時期に格納されたわけではないということに注意を払ってこの数字を見ていただく必要があります。

RefWorksを使い始めた当初、利用者はEndNoteやReference Managerに慣れているので、RefWorksをどこまで使ってもらえるのかわからないということがありました。ただ御覧になってわかる通り、年を追うごとにRefWorksのアカウント数は急激に増えています。これについては特に説明があるわけではないのですが、一番下にあるこの大学が一番最近参加した大学なのですが、ここが一番よくRefWorks、RefShareを使っているということがわかります。これはオンタリオの技術系の大学なのですが、最近大学になりました。わりと小規模な大学なのですが、最近RefShareの使用を強力に押し進め始めているのではないかと思っています(スライド23,24)。

(7)利用者調査

トロント大学でこれからさらにやって行きたいと考えていることの一つに、ユーザに話を聞くということがあります。少し時間があるようですので若干本題からそれますが、Scopusについてはエルゼビアと非常に良い経験をしました。これは我々にとって新しい試みだったのです。彼らは大学にやってきて、検索のインターフェイスについて、大学の教授や研究者を対象に、どこが良い点でどこが使いづらい点かということとを2年にわたって調べていました。これはトロント大学の図書館において、非常に良い経験になったと思っています。現在、電子ブックへの関与が始まっていますが、これについてもエンドユーザにその経験についての話を聞きたいと思っています。電子ブックをどのように見つけたか、どのように使っているか、またその後どうしているかということを知りたいと思っています。これはScholars Portalのユーザについての、早期の暫定的な調査です。これについては、電子ジャーナルや、電子ブックの利用についてというものは少し違った結果になっています。Scholars Portalの利用状況を調べたところ、20%が図書館内で行われているということがわかっています。当然のことながら、残りの大多数の人は、図書館外で使っているということになります。どのようにしてScholars Portalについて知ったのかということも聞いてみました。これも驚くに値しないことではないかと思いますが、重要なジャーナルを探していて、Scholars Portalに行き着いたというのが一番多い答えでした。それからユーザの多くは、いつも使っているお気に入りのデータベースからScholars Portalに行き着いたということを書いていました。

先ほど、利用状況についてはそのうち飽和状態に達するのではないかと考えているとお話しました。ただ、この見方は間違っているのではないかと思います。というのも、授業で課題図書との関連は、Scholars Portalを使う理由の下から2番目で、4%にしかなっていません。我々は、教授や大学院生に自分のウェブページ、あるいはコースのページからリンクするように働きかけていますが、今後この数字はさらに上がっていくのではないかと思います。またユーザに対して、「何のためにScholars Portalを使ったのですか」と聞いてみました。ありがたいことに大部分は、「授業のため」と答えてくれました。ただ、研究関係の答を見ますと、助成を受けている研究とその他の研究を併せてみますと、依然としてかなりの数字になります。通常、我々はこのような定量的な調査はあまり行っておりません。皆さんの図書館ではどうなのか存じ上げませんが、私達の図書館では通常、メールだとかの形でコメントを色々もらうので、それを管理職に見せて、われわれのやっている仕事はうまくいっているということを伝えています。実際にここに出ている個別のコメントを読むことはしませんが、このようなコメントをユーザからもらいました(スライド29)。

(8)計画のプロセス

先ほども申し上げましたけれども、今は図書館員として、非常に面白い時代に入っていると思っています。さまざまな変化が、目録、蔵書構築、レファレンスといった分野で起こっています。これは、ユーザの情報ニーズに対して私達がどのように対処すべきか考える非常に良い機会であると思っています。今後、GoogleやYahoo、マイクロソフトSearchingなどといったところと競合していくにあたり、ユーザに対する支援においては、よりクリエイティブでなければならないと思っています。それゆえ将来についての計画は継続的に行うべきプロセスです。将来の計画についてのアイデアというのは、スタッフやさまざまな委員会、図書館の管理職ですとか、館長などからいただいています。ユーザという一番大きなカテゴリが抜けています。図書館の方で、次に何をやるかという計画を出します。計画については当然資金が関わってきます

ので、20の大学全ての図書館、館長などの承認が必要になります。

3. Scholars Portalの今後

もっとジャーナルやデータベースを増やしたいと考えています。私の最近の関心事である、電子ブックもこのリストに加えていきたいと考えています。ユーザはそれがジャーナルの中に掲載されている論文なのか、あるいは本の章の一部なのか、あるいは参考図書の一部なのかはあまり気にしないと思うのです。Googleを使って検索する時は、全てを検索対象としていると考えます。先ほども申し上げましたけれども、統合検索システムのマルチサーチは、完全には実装していません。まだまだやらなければいけないことが残っています。それから、最近、電子リソースマネージメントのVerdeを導入し始めました。こちらのリスト(スライド32)には、すでに始めたさまざまな取り組みが載っています。右側には今後取り組んでいきたい活動が示されています。電子ブックについては、マイアライブラリー(Myilibrary)という商品が出されています。

ユーザにもっと意見を聞く機会を増やしたいと思っていますので、BBCのサイトで見たようなユーザパネルといったものを導入したいと思っています。ユーザが、こちらから連絡しても構わないということをお私たちに伝えてきた場合は、そのユーザに対してさまざまな調査、研究を行うということを想定しています。さまざまな出版社の出版しているものについての利用状況がこれからもう少し収斂されてくると思うので、そうしたら利用状況についてのさらなる分析をしたいと考えています。

また情報の伝達方法といいますが、情報の提供方法についても、今までとは違うやり方を試みたいと思っています。たとえば、ipodやPDAを使うというのが一例です。それから、遠隔会議システムを使うことも考えています。そうすれば、20の大学からわざわざ一か所に集まる必要も無くなるからです。現在のところ、実際の大学の講義の中でこのようなサービスを使っていくことがそれほどなされていませんので、今後はトロント大学の中での講義と、このような情報システムの利用をより結び付けていきたいと思っています。それからユーザ認証のシボレス(Shibboleth)です。

(1)電子ブック

電子ジャーナルについてのアーカイビングを進めてきているように、電子ブックについてもライセンスを取得し、ローカルデータベースの中に格納して、アーカイブすることも考えています。学生がScholars Portalを使って検索をする際に、電子ブックのメタデータは利用可能な状況にしておきたいと思っています。もう少し電子ブックについてコメントしますと、現在、少なくとも章のタイトルが見られるようにする、あるいは目次、あるいは章ごとの抄録が読めるようにするという点についても可能性を探っています。

(2)ユーザパネル

ユーザパネルについては今年の夏に行うつもりでしたが、今月やっと実施される運びになりそうです。Scholars Portalの中にあるその他のサービスについても、ユーザパネルを作りたいと思っています。

(3)レポート作成

利用状況の数字についても、中央で一括管理できるようにすれば、大学側にとっても資金の節約になると思います。そうすれば、ダイナミックにレポートを作成していくことができます。どこからの情報だったかに拘らず、レポートの作成ができます。

(4)新たな情報デリバリーの方法

PDAの利用についてももう少し追求していきたいと考えています。PDAについては、後ほど時間があれば是非皆さんからコメントをいただきたいのですが、もともとPDAは医師がよく使うのではないかと思っていました。実際には、PDAを使っているとは言っても、その中身はメールを使う、電話をする時に使う、あるいはオーガナイザとして使うことがほとんどで、PDAを使って論文を読むということはあまりなされていないということがわかっています。また学生だったら皆持っているiPodについてはどこまで利用されるのか、どうだろ

うと思っていたのですが、最近Nature誌の会議に出席しましたところ、Natureの論文はiTuneで最もダウンロードされるもののうちのトップ25に入っているということです。

(5)カンファレンスシステム

遠隔会議システムについては、メンバーやさまざまな出版元と話を進めているところですが、こういった遠隔会議システムや、ウェブを使ったウェビナ(Webinars)を提供し始めているところもすでにあります。また、さまざまな製品についてユーザサポートを提供できるようにしておくべきだとも思っています。スタッフからのコミュニケーションということでもさまざまな方法を模索しています。例えば、ブログというのも一つの方法でしょう。それから、Googleの例ではないですが、さまざまなサービスを一つのサービスセンタから提供できるようにするというのも考えています。

(6)授業との関係

これもやってみたいことのひとつなのですが、今まで、教授や大学院生に話を聞く機会がありませんでした。Scholars Portalを、それぞれが持っているウェブページやコースのページにどう取り入れてもらうかということは今後模索したいと思っています。トロント大学は、最近、コースワークシステムとしてBlackboardを選択しましたので、これとScholars Portalの統合をさらに図っていきたいと考えています。

(7)利用者認証

それから世界の多くの大学がそうしているように、我々も現在シボレス(Shibboleth)について検討しています。IPアドレスよりも認証により適している方法かどうかを現在検討中です。

(8)研究者コミュニティの支援

また、研究者は研究コミュニティの中で研究をやっていくもので、私は研究者が行う研究について重要視していますので、研究者同士が同僚との協調をさらに図れるようにするにはどのような支援ができるかということも考えていきたいと思えます。ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、RefWorksの中にはRefShareという機能もありまして、それを使いますとさまざまな情報を研究者同士でシームレスに共有することができます。またオンタリオ州にある大学全ての教授が今までに発表した論文も、ある一つの場所で全て公開できるようにした方が、政治的にも好ましいのではないかと思います。

(9)新たな資源共有モデル

それからILLのパッケージから得ている情報もあります。それについても、新しい、よりクリエイティブな方向があるかも知れません。例えば、紙の本をある大学からまた別の大学へと常に受け渡しているようなことがある場合、その本の電子版のライセンスを取得して、全ての大学でそれを提供できるようにすれば良いという考え方もあります。著作権の期限が切れている古い本については、物理的にその本をさまざまな大学間で貸し借りするよりは、デジタル化した方が良いという考え方もあるでしょう。また、物理的にその本の貸し借りをする代わりに、ライセンスを取得するという方法もあるでしょう。また図書館の方でこれをする準備ができていのかどうかはわかりませんが、大量の電子ブックへのアクセスを提供するというのも考えられます。たとえば数カ月のうちに、ユーザがある本を3、4回使っているということがあれば、それを自動的に購入するというそういうやり方もあります。蔵書構築の担当者からは何らかの反論があるかもしれません。

以上が、簡単でしたが、Scholars Portalの概要ということで、どのようにしてこの取り組みが始まったか、どう進化して今後どう変わっていくかということについてお話をしました。
ありがとうございました。

〈土屋〉

インタラクションをできるだけというご希望なものですから、日本ではどうなっているかということについて、早稲田大学の電子図書館構想について簡単にご紹介していただいて、もしHolderさんからレスポンスがあ

ればまたそれを使って続けたいと思います。

〈今村〉

早稲田大学図書館情報管理課の今村と申します。本日はお時間いただきまして、ありがとうございます。私どもの大学の、先ほど電子図書館というようなことをご紹介いただきましたけれども、むしろデジタルリソースにかかわる取り組みというようなタイトルの方が適切かと思ひまして、このように題をつけさせていただきます。15分から20分くらい、簡単ではございますけれどもご説明したいと思います。若干歴史めいた話も出て参りまして、目録の電子化から始まりまして、今日を中心になるかと思ひますが、データベース、電子ジャーナルへの取り組み、それから2005年から始めた新しいプロジェクトとしての古典籍総合データベース、また、ここでご説明する必要もそれほど無いのかもしれませんが、機関リポジトリへの取り組みについてもご説明できたらと思ひます。

1. 目録の電子化

ちょっと古い話ですけれども、1987年にIBMの図書館パッケージDOBIS/LIBISに日本語処理機能を付けたものをWINEとして本格的に所蔵目録の電子化に取り組みで参りました。1988年からは、紀伊国屋書店さんと共同で、和書のデータベース化のプロジェクトを行っておりまして、和書の遡及入力にも取り組んでおりまして、WINEには今、古書、稀少書を除いては、だいたいの資料を入れてきたというような歴史がございます。それから次の目録データのところですけれども、MARC21準拠といひますのは、今申し上げたDOBIS/LIBISを1998年にイノベティブ社のINNOPAC、今はミレニアムとか言っていますけれども、このシステムに切り替えまして、日本語図書につきましても、当時のUSMARCのフォーマットの形式にして、データを蓄積してきたというようなこととございます。この副産物と言ひますか、それによって電子ジャーナルとか電子ブックのMARCも、プロバイダから送られてきたものをそのまま収録することができるようになったという下地がございます。

目録の電子化ということで続きですけれども、書誌、所蔵データ数の推移、当然ながら右肩上がりになっていくわけですけれども、今日ちょっと見て参りましたら、今日の時点で書誌数がだいたい233万を越えまして、所蔵で389万、ですから今年中には400万に達するであろうということで、着実に増えて参りました。これを1999年の4月から取っておりますのは、現行のINNOPACのシステム、毎年4月1日にその時の正確な数字をいうものを出して、それを年報にも載せていました。これがずっと上がってきているような形になっております。

次にOCLCとの連携ということでお話をさせていただきますけれども、こうしてWINEに蓄積されてきた和書のデータを、フォーマットを変換してOCLCのWorldCatにバッチアップロードするというプロジェクトを、1997年来行っておりまして、最初に1995年、それから2回目に2001年、2004年と、最初の3回で約71万件を提供してきました。1回目1995年で2回目2001年と大きく間が空いておりますのは、今申し上げた通り、図書館システムを切り替えたことによって、さまざまな作業が生じたからということとございます。2004年の3月以降は、日本語の新刊のデータですけれども、コンスタントにOCLCへ登録しております。5月以降は数字が安定してきておりまして、だいたい2000件から3000件の間で推移しております。こうしてOCLCに所蔵が登録されるわけですので、そのことが、WorldCatにおける早稲田大学のプレゼンスの確立に役立ってきたというようなこととございます。現在、OCLC-ILLの海外展開の基盤となっていることも事実でございます。受付はだいたい2500件で、今後少しずつですが増えていくようなトレンドにあります。依頼の方はだいたい400件から500件の間で動いております。この8月に、みなさんご承知の通りだと思ひますが、WorldCat.orgというものが公開されました。これによりましてウェブサイトから直接検索ができるというようなことになったのも、一つのトピックかと思ひます。

こちら(スライド7)はその画面のイメージです。早稲田大学で引いてみて4344件ヒットして、一番上の書誌を見ると、下の方にですけれども、Waseda University Libraryとございまして、クリックしていただくとWINEのほうに飛ぶというような形でWINEのデータベースの視認性というのも上がってきたということとございます。

それからもう一つ、これを忘れてはいけません。RefWorksとの連携についてご紹介申し上げたいと思ひます。これ(スライド8)はWINEの詳細書誌で、「早稲田大学図書館紀要」と出ていますけれども、この

上の部分にボタンがついておりまして、RefWorksがございまして、これをクリックしていただきますと、画面がちよっと飛ぶんですけどもまずRefWorksのログインセンターの画面に入りまして、そこからダイレクトにRefWorksの方にWINEの書誌データを落としてくることができます。入手の可否のところにWINEへのリンクもありますので、もうすこし細かいデータ、所蔵のデータ等も見なければそちらの方をどうぞということになります。以上がだいたい目録の電子化のお話ですけども、続いて、データベース、電子ジャーナルの方に話を移させていただきます。

2. データベース／電子ジャーナル

各種データベースで今だいたい5万タイトルの電子ジャーナルが利用可能ということです。これには重複もございまして、あとそれから中国語の資料ですね、中国の機関の雑誌は入っておりませんので、だいたいアバウトな数字で5万タイトルの電子ジャーナルが利用可能ですよというようなことで、年報には出させていただいております。主要な学術出版社に限って言えば、だいたい6000タイトル、これはそれほど驚くべき数字ではないと思います。日本の状況はどこも同じではないかと思っています。電子ブックは約30万タイトルとありますけれども、これはNetLibraryと、EEBOとECCOという大きなコレクションを購入して、そのMARCをWINEにロードしたものですので、30万タイトルほどですが、すべてWINEで検索して、そこからリンクで利用するというようなことができます。これが簡単な数字です。

データベース、電子ジャーナルに関わるサービスについて少しご紹介したいと思います。まずは図書館システムからシームレスな検索というようなことでですけども、画面はこのように出て参りまして、WINEで"Tragedy of Hamlet"、"Prince of Denmark"という風に検索すると、このように一覧の画面が出て参ります。ここでは、紙媒体の資料も電子媒体の資料も同時に検索できるというところが、特徴と言うほどではありませんが、利点としてあります。画面上に媒体とありまして「Eブック」とありますので、ここをクリックしていただくと詳細書誌に行きまして、そこからこのリンク情報へ行きますと、これはNetLibraryの方ですのでこのように本や資料へのシームレスな利用というものが実現されております。

それから次(スライド12)はジャーナルポータル画面です。これは電子ジャーナルのみを一元的に検索したい場合のサービスだと考えると簡単かもしれません。タイトル、ISSNですとか、主題によって検索することができます。次(スライド13)はリンクリゾルバですね、Scopusの画面が出ていますけれども、今open accessというワードで検索した結果が出ていますけれども、この下に「find fulltext」と早稲田の図書館のマークが出ていますけれども、ここをクリックしていただきますと、このような画面が中間的に出てくるわけです。さらに「view this article」を押していただきますと、これはABI/Informですけども、このデータベースにアクセスして、ここからフルテキストのPDFを見ることができるというようなものです。続いてこれ(スライド14)は統合検索システムです。論文名であるとか、テーマ、分野等から学術論文を横断的に検索してくれるシステムです。これもセントラルサーチというのを使っております、シリアルズ・ソリューションズ社の製品をそのまま使っています。こちら(スライド15)が学外アクセスで、自宅等からですね、データベース、電子ジャーナルを利用する際にこれが入り口になっています。「非常勤の方はご利用になれません」というのは、契約の問題でして、今は専任教職員、学生のみということで、非常勤の方は学内でご利用頂くというような形になっています。必要なソフトウェアがWindowsとIE5.0以上というようなことなのですが、システムを変更する予定でして、Macintoshでも利用できるようにする予定でございまして。

これ(スライド16)が学術情報検索の画面ですけども、こちらの画面は今までご紹介申し上げたさまざまなサービスを統合的に検索するための、一種のポータル的な機能を持たせています。これは大学のホームページであるとか、あるいは大学のポータルである早稲田ネットポータルというのがあるんですけども、こちらに直接リンクを貼りまして、ここから学術情報に関しては、このサービスによってサービスを行っていく、というようなことを目指しています。今ご説明申し上げたような電子ジャーナルポータルですとか、それからセントラルサーチのような学術論文の横断検索サービスというものもトップページから出しております。さらにもう一度、というところを押していただくと、それぞれもう少し細かい精度でのデータベースの一覧を作るようになっています。

こういったサービスを行っているということでして、次には管理の部門なんですけれども、こういったERLシステムをマネージメントするシステムとして、これは図書館システムのミレニアムと同じところからERMを購入しまして、現在試験的に動かしているところなんです。これによって、データベースとか電子ジャーナルの契約

の内容であるとか、その選定であるとか、支払いであるとか、さまざまなことを包括的に管理することができる、一種の図書館への業務支援サービスということになりますけれども、こうしたリソースに関する概要をWINE、OPACから出して利用者に提供することも可能になっています。以上が、データベース、電子ジャーナルに関する、最近これまでにやってきたサービスの概要でございます。

3. 古典籍総合データベース

続いて古典籍総合データベースの話させていただきます。2000年頃より大学が所蔵しておりました資料の電子化を、外部資金などを導入しまして図書館は積極的に進めて参りました。これは当初よりウェブ上での公開を目的としております。2005年より、現在の古典籍プロジェクトを始動いたしまして、今年度を入れてですけれども、今後5年間で30万冊の電子化を予定しております。特徴といたしましては、表紙から裏表紙まで全データを画像として収録するというようなことです。目録的には、現代の図書と同じようなルールで目録化します。ただし、NDCであるとか、件名であるとか、そういったところは省いています。これは目録の簡略化ということを目指して、スピーディーに資料を提供していきたいというのが、一つの目的としてございます。現在公開しているコレクションが上の方にございます。それから公開予定、この秋に予定しているものとしてこの2点が上がっております。これ(スライド20)が古典籍の総合データベースのトップ画面です。図書館のトップ画面からも案内をしておりますが、このデータベースに収録されている書誌情報ですとか、あと画像へのリンクというものは、WINEからでも検索することができるようになっております。入り口がいくつもあるというような形になっております。

4. 機関リポジトリ

続いては、機関リポジトリ(IR)です。これは背景というのはそれほど特徴的なことは無いのですが、従来図書館はIMAS、統合マルチアーカイビングサービスというようなものを提供しております、これによって学内で生産されるデジタル学術情報の提供を行って参りましたけれども、こうしたものをより効率的に幅広く学内外に発信し、また半永久的に保存するための枠組みとしてIRを検討して参りまして、2005年にこれを本格的に立ち上げたわけでございます。これは図書館だけの事業推進体制というわけではありまして、全学的な事業として進めていくことを行っております。情報化推進プログラム九か年計画第二次ということで、2006年から2014年まで予定しております。これはもう実際に動いているものですが、例えばこの画面にある、研究業績データベースの研究者データベースとして既の実現されております。研究者ワークスペースというのはまだこれは構想中でございます。それからオープンコースウェア(OCW)ですとか、Course N@vi、これはラーニングマネジメントシステムですが、こういったものと機関リポジトリを連携させる。例えば、古くなったと言ったら変な言い方ですが、ホットではない教材などを機関リポジトリに保存するとか、あるいは、研究業績データベースから研究者が自分の本文の論文をリポジトリに登録するとそれを参照することができるとか、相互的な連携を今考えております。

こちら(スライド23)がWaseda Open Course Wareのトップページです。大学の講義資料を無償で公開することになります。こちらがCourse N@vi、書いてありますがラーニングマネジメントシステムです。これらはまだ試験運用中ですが、将来的にはこういったものと連携を考えております。

これからの取り組みといたしましては、一つには情報リテラシーというようなことがございます。また一方で、デジタルレファレンスサービスというものについても構築を進めていくことを考えております。それからこれは、Web2.0時代の図書館サービスということで、ちょっと流行に乗ってみたというようなところですが、ユーザ参加型的な発想への対応、これは具体的に何があるというわけではないのですが、一般的には実践されているレビューとかランキングの付与の問題ですとか、それからflicker.com、有名な写真共有サイトですが、そちらにおけるタグの付加、こういったものについても、図書館としても考えていく必要があるのではないかということで、ここに出させていただきます。

以上簡単でございますが、早稲田大学図書館で考えております、というか行っておりますサービスの概要を説明させていただきました。ありがとうございました。

<質疑>

<土屋>

部品は皆おなじという感じがするのですが。

<今村>

その通りですね。部品はやはり新たに開発するのではなく、あるものを効率的に使うという、よく図書館の中で言われているのは、車輪は二度発明する必要はないと、よく出てくるフレーズですけども、そういったことで考えております。

Q: 試行版が多いようなのですが、いつごろ本運用になるのでしょうか。

A: <今村>「学術情報検索」のことですよ。試行版が非常に多いというのは、永遠のβ版というようなところで、それこそWeb2.0と言っているところを言いたいわけですけども、この学術情報検索の画面につきまして、画面といいますかこのシステムにつきましては、現在、ユーザ、また図書館員の意見を入れまして改訂を予定しています。それから、最後に試行版うんぬんというように説明させていただいたところにつきましては、これは図書館が行っているものではございませんで、全学的に情報推進化プログラムとして進めているものですので、これについては図書館が今スケジューリングするというわけにはいかないのですけれども、こうしたものを提供していきたいと、そしてこれとリポジトリとの連携を考えていくというようなところで試用というか、試行期間というようにご理解頂ければ助かります。

Q: ユーザパネルについてですが、これについてもう少し詳しく教えていただけませんか。

A: <Holder>先ほども言いましたけれども、エルゼビアと大変良い経験を持つことができまして、エルゼビアは今でも時々キャンパスを訪問して、新しいサービスについての情報提供してくれたりしています。既に早稲田大学でお使いだと思いますが、Author identifierですとか、Citation truckerといった製品についての話も聞いています。このサービスを導入する前に、ユーザが何を求めているかを、実際にエンドユーザと話をすることで把握しています。図書館では過去に良い仕事をしてきているという感覚を持っていますが、しかし図書館側から実際にエンドユーザに対して、我々が本当にいい仕事をしているかどうかを聞いてみるということはしていなかったのです。新しいサービスを導入する際は、実際にエンドユーザのところに出かけて行って、そのサービスが本当に使えるのかどうかをテストしてもらおう仕組みを作りたいと考えているわけです。例えば、哲学や歴史といった分野では電子ブックを求められていないのではないかと図書館員がいます。例えば哲学ですとか歴史のユーザがサインアップをした時に、この分野についての電子ブックを欲しいですかと聞いてみるというようなことを考えています。

Q: スライドの19番についてですが、サーチとクエリーというのは具体的に何が違うのでしょうか。

A: <Holder>少なくとも私の理解では、誰かがログオンした時に1セッションと考えられます。例えばScholars Portallにログオンするとそれが1セッションとカウントされるということです。サーチというのは様々なデータベースで検索をすることを指していて、クエリーというのはあるデータベースで行った検索を指しているというのが少なくとも私の理解です。例えばScholars Portallにログオンするとそれが1セッションになりますし、そのセッション内で、つまりログアウトするまでに例えばWeb of Scienceでサーチしたとすればそれが1サーチと数えられ、さらにそのデータベースの中で3、4回検索をすればそれが3だとか4のクエリーとカウントされるということです。

Q: なぜ急激にクエリーの件数が増加しているのでしょうか。

A: <Holder>だからこそエンドユーザパネルの役割が重要になって来るわけです。実際にエンドユーザに聞いて、何故こういう現象になっているのか、その理解を深めようということです。一つ考えられるのは、例えば自分で気に入っているデータベースにたどり着いて、その他それ以外の場所でどう検索して良いかわからないから、そのデータベースの中で何度も検索してみるという、そういうことが起こっているのではない

かということとは言えると思います。

〈Holder〉

逆に私からご質問してもよろしいですか。私からの質問は、Google Scholarについて私たちは神経質になるべきなのか、つまり、Google Scholarに自分達の仕事を取られてしまうと思って良いのでしょうか。そのように思う根拠はあるのでしょうか、ということです。一つ実例を申し上げます。これは事後にこういうことがあったということを知った例なのですが、エルセビアから聞いた話では、エルセビアがトロント大学で医薬分野の調査をした時、上級の研究職の人達に、例えば、ある学術論文だとか、その著者について調べたい時、あるいはある著者が他にどういところで著作物を発表しているかを知りたい時、どこで検索をしますかと聞いてみたところ、ほとんどの人がGoogleを使うと答えたということでした。

〈参加者〉

先ほどの、どうして研究者が情報を検索したい時にGoogleを使うというのかについては、その通りだろうと私も思います。けれども、何故ノーと答えたかという、検索するテーマによって何をを使うかをユーザは賢く選択していると思います。もしくは、選択できないから図書館のホームページに行ってどんなデータベースを検索すれば良いだろうかということ、リンク集を見たり、先ほどの早稲田のページのところに書いてあったように、このデータベースを使えば良いですよということを目安にして検索している、もしくは図書館員にどのデータベースを使ったら良いですかと聞いているということがあると思います。つまり現状では、ウェブにしかないものもありますけれども、データベースにしかないものもたくさんありますから、Google Scholarに載っていないものがたくさんある状態、それらが全部載るとは私は考えられないと思いますから、ノーだと思います。

〈Holder〉

確かに、研究者がGoogleを使って検索してみたところ、あまりにも検索結果が多く表示されるので、それについて好ましく思わない可能性はあると思います。例えば、"REM"で検索をした場合、REMをいわゆるレム睡眠のつもりで検索しても、Googleで"REM"と入れるとバンド名としてのREMと認識されて、バンドについての情報がたくさん出てきます。でもだからと言って、図書館側からユーザに対してどうすればより早く、より自分の求めている情報を得ることができるか、それについてさまざまなサポートを提供しなくて良くなるということではないと思います。

あともう一つの例をお話しします。目録の検索結果のログの分析を試してみました。具体的に何%だったという数字は覚えていないのですが、検索をしている最中にスペルミスが原因でその検索が上手くいかないということも結構あります。みなさんの目録がどの程度インテリジェントかどうかというのは存じ上げないのですが、例えばGoogleのように、「今こう入力しましたけれど、このことですか？」と聞けるようなそんなものがあればと思っています。ですので、Googleのそのようなサービスに追いつくにはやるべきことがあると思っています。

シボレスの話に戻ってもよろしいでしょうか。これについて一つ可能性があるとしたら、このことだと考えています。例えば、マーキュリーに関して検索しているユーザがいたとします。この場合、マーキュリーというのは惑星の水星という意味のマーキュリーを指しているのか、あるいは水銀のことを指しているのか、あるいは神のマーキュリーのことを指しているのか、あるいは車のマーキュリーのことを言っているのかかわからないわけです。けれどもシボレスを使って、検索をしている人が天文学の学生であるということがわかれば、その情報を使って、おそらくこの生徒は惑星としてのマーキュリー、つまり水星について探しているのだろうということを結論付けることができます。これはあくまで一例です。

Q: シボレスの続きなんですが、現状の認証はどのように作られているのですか。

A: 〈Holder〉現在シボレスについては、パイロットプロジェクトを始めるべく準備を進めているところで、まだこれは始まっていません。現在の認証方法はIPアドレスによるもののみです。リモートで使っている学生については、学生カードとパスワードで認証をしています。ですから現段階では、そのユーザがどんな学生なのかを知るための洗練された仕組みというのはありません。

〈Holder〉

電子ブックについてはいかがでしょうか。ユーザは電子ブックを求めていると思いますか。答えはイエスです。実は私が理解できないのは、すでに電子ジャーナルは導入されている私の大学でさえも、図書館員の多くが、例えば人文系だとか社会科学系の学生は電子ブックを求めていると思っていない人が多いのです。これが何故なのかというのがよく解らないのですが。

〈参加者〉

人文社会系のライブラリで働いています。こちらで使っているのはNet Libraryですが、一度に1ページしか表示されないとか、たくさんダウンロードできないとか、プリントアウトできないとか、制約があります。電子ジャーナルの場合は一度にそのままPDFでプリントアウトすることもできるわけですが、電子ジャーナルであっても人文社会系の人には紙に打ち出すとか、雑誌単位で見るといようなことをしたがるので、電子ブックのトライアルをしても、欲しいという強い要望は出てきません。

電子ジャーナルはどんどんプリントアウトできますけれども、電子ブックの場合は1ページ毎にやっていかなくちゃいけないとか、マイアイライブラリ(MyLibrary)をトライアルしたことが無いので機能はわからないですけれども、ブラウジングとか利用に関してやっぱり非常に制限されている。そういうサービスだからまだ嫌だという声があります。また日本の場合は、携帯の文化も結構あるので、携帯で読みたいというような、いつでもどこでも読めるのがよくて、PCに向かってしか読めないというのは嫌だと。ただアメリカほどPDAは発達していないですね。そういうようなところもちょっと若者にも電子ブックは好まれない。コミックを見ていただくとわかるのですが、日本のコミックはとてつもなく携帯で読み易くできていて、とても素晴らしいんですけども、本は駄目だなと思います。

〈Holder〉

この点については、先ほどのプレゼンテーションではあまりお話ししませんでした。電子ブックについてのプレゼンテーションであればもっとお話ししたと思います。今マイアイライブラリに関しておっしゃったことはまさしくその通りであると思うんです。なぜマイアイライブラリを選んだのかと言うと、マイアイライブラリの場合は、ユーザがどのような機能を求めているか、一緒になって探っていくという姿勢が見られるからなんです。ですので、出版社とマイアイライブラリと私達とで、ユーザがどのような機能を求めているか、それをもう少し探っていければと思っています。早い段階で導入することについては問題点も多くあるのですが、逆に利点も多くあると思っています。携帯については、北米での携帯の使われ方は日本での使われ方とは違うとは思いますが、これについても先ほどのユーザパネルが重要な役割を果たすわけです。ユーザパネルの中で、ユーザが実際にその機能を求めているということがわかれば、マイアイライブラリや出版社と交渉して、これをユーザが求めているんだからそれを提供できるようにしましょうということが言えます。

先ほどのScopusの話に戻りますが、研究者に対して可視化のツールについても聞いています。研究者に対して可視化のツールを見せた時、非常に感心して、これは良いものだという反応が出てきました。ただ、「これをあなたの研究でどのように使っていきますか」と聞いた時、「多分研究には使わないだろう」と答えたそうです。それゆえScopusは可視化ツールを開発しないことに決めました。それゆえ、これはどうなんだろうと思った時は聞いてみるのが重要だということがわかると思います。

Q: 電子ブックというのは何か一つのものを探す、どの辺に出てるかなというのを探して読むという点は非常に良いですが、本のブラウジング機能が無いんですよね。何かを見ようとして目録を見て図書館に行くと、そこでその本を見るときは限らず、周囲を見て、最初に自分が意図した本ではないものの方が、自分の希望に合っているということが良くあります。ところが電子ブックの場合はそれができない。電子ブックの方にも、本棚に並んでいる、似たような分類の本を「こういうようなものもありますよ」という形でぱっと見せられるような機能が付いたら使えるのかなと思いますが、いかがでしょうか。

A: 〈Holder〉その通りです。今おっしゃったようなことはAmazonが既にやっていると思います。ある本を探

して、ある検索結果が出てきた時に、それと良く似た本はこれもあります、これもありますというように出してくれるわけですね。あるいは、この本を読んだ読者はこれも読んでいますということも教えてくれます。さらには読者のレビューも載っているの、例えば学生だとか教授がそれぞれ自分のウェブサイトで本についてのレビューを載せることも可能ではないかと思えます。そうすれば、ある教授はこの本とこの本を読んでいるけれども、こちらの方が良いと言っているということがわかるわけで、こういうことができたらいいのではないかと思います。また、人文系と社会科学系については、実際に紙の媒体も電子媒体も両方を購入する状態が続くと思うので、その場合はブラウジングもできるということと言えます。

〈土屋〉

そうすると、Googleだけではなく、Amazonにも脅威を感じるということですね。

〈Holder〉

そうですね。

Q: 電子ブックを、教員はどのように学生に提供しているのでしょうか。

A: 〈Holder〉現段階では提供していません。教員に対して、「このようなものがありますよ」と情報提供し、教育していくことが必要なのではないかと思います。こちらから情報提供できる準備が整ったところでそういうことをやりたいと思っていますが、現在のところは、電子ブックを求めて私達のところに来る教員というのは非常に少ないです。あともう一つ、世代間で違いがあるのかどうか分からないのですが、CSAは最近コンテンツスキャンという会社を買収していると思います。コンテンツスキャンの創設者の一人を個人的に知っているのですが、その彼はどこかに出張するあるいは旅行するという時にはPDAに20冊の電子ブックを搭載していくそうです。空港で、あるいはホテルの部屋の中で、何冊も物理的に本を持って行くかわりにPDAで本を読んでいると言っていました。私だったら、そんなことをしたら頭がどこかおかしくなってしまうんじゃないかと思うんですけども。

Q: たくさんの情報が検索できるようになって、より多くの情報が使われるようになった時に、ガイドとかインストラクションが必要になってくるのではないかと思うのですが、その時Scholars Portalではディスタンスラーニングの機能を活用するとか考えていらっしゃいますか。あるいは早稲田大学さんでも機能の追加ですとかサービスの追加とかということは考えていらっしゃいますか。あるいはすでに提供していらっしゃるでしょうか。

A: 〈Holder〉今おっしゃったことについては実際に考えてはいます。非常に興味を持っている分野ではあります。ただ私の個人的な考え方を申し上げますと、Googleを使うのにわざわざトレーニングを受ける必要のある人はほとんどいないと思うんです。ベンダーが来て、私達の製品の使い方についてはエンドユーザトレーニングを提供しますと言った時、私はその製品そのものがどこかおかしいのではないかと感じてしまいます。

〈今村〉情報が増えるに伴ってガイドのようなものと言いますけれども、今私どもが得られる情報というのは本当にそんなに数が多いものなのかということが、個人的にはどうかと思いました。要するに道筋のようなものをですね、色々図書館でそれぞれ考えられていると思いますが、私どもの考え方としては、先ほどご説明した学術情報検索、これはまだ試行版ではございますけれども、例えば図書、雑誌であればタイトルから探すというレベル、論文であればこれは論文名から探すというようなことで、大きく道筋をつけてはいます。先ほどHolderさんの方の講演で説明があった通り、ユーザというものは、それが本の一部であろうが、論文であろうが、そういったものはあまり関知しないというようなところがあるかと思えますので、やはりGoogleのようなものは非常に有効なのかと思います。

Q: 20番目のスライドに関してHolderさんにお尋ねしたいのですが、私のいる図書館では電子ジャーナルが充実した結果、ILLの件数が減っています。トロントはもっと電子ジャーナルが充実していると思われるので、私の予想ではもっとILLが少なくなっていくはずだと思うのです。そのことによって、ILLのスタッフを別のことに振り分けるというようなことを考えていたのですが、このスライドのように情報が増えることによ

て、ILLがもっと増えるのであれば、これは大変なことだと思っています。これは単純にScholars Portalだからこうなのか、その辺りはどのようにお考えになっているかお話をお聞かせ下さい。

A:〈Holder〉今おっしゃったように、私も当初はILLのリクエストの数が減るのではないかと考えていました。逆に数が上がっているのなぜこういうことが起こっているのかということで考えられるのは、このリクエストはジャーナルではなく、本のためのものであるということではないかと考えています。ジャーナルの論文を読んでみて、例えば、脚注や参考文献リストで面白そうなものを見つけたのでそれをリクエストする、そういう人が増えているのではないかと思います。ただこれには良い面と悪い面とあって、私達の使っているシステムの中ではILLのリクエストを電子的に、非常に簡単にできるということでこういう結果に繋がっているという一面もあります。この状況が続くかどうかについてはなんですが、これについてはもう少し調査研究が必要ではあると思います。日本ではどうかわかりませんが、少なくとも北米の場合はILLで本を借りるというのは非常に高くついてしまうのです。もしかしたらILLのサービスを使うよりも、その求められている本の電子版を買った方が安くつく場合もあるでしょう。

Q: そうすると、電子ジャーナルを充実させた次に我々がやることは、単純に考えれば電子ブックを充実させていくことかと思うんですが、やはりそういう方向でしょうか。

A:〈Holder〉そう思います。

Q: ILLは高いと、非常にコストがかかるということを仰っていたわけですが、トロントの場合ユーザにはどのくらいチャージされているのですか。

A:〈Holder〉ユーザに対してはチャージはしません。無料で提供しています。

Q: そうすると、減らすということが非常に重要であるということですか。

A:〈Holder〉やはり求められている情報を一番経済的かつ一番早い方法でユーザに届ける、そのためにはどうしたら良いかという観点で考えるべきだと思います。

〈佐藤義則〉

このグラフですが、これは日本のILLの状況で、一つの大学ではなくて、NACSIS-ILLの数字で、2004年の段階で大学のうち加盟していないのが80くらいです。2005年の段階ではほぼ全ての大学が入っている、90%を越しているのですね。ブルーの方が外国雑誌です。これは1999年をピークに、2000年からどんどん下がっている。この辺で何があったかと言うと、アカデミックプレスのアイディールが始まったのが1999年で、それからSD21のトライアルから、その適用範囲が変わったのが2000年ですね。2002年からは国立大学の主だったところに、コンソーシアムベースのエルゼビアとの契約が入ります。その結果、外国雑誌についてはILLが減少する。赤い方は国内雑誌で、こちらの方はほとんど今までのところ手当がされていないので件数が上がる。そういう状況があります。もちろんこれには参加館が増えているという影響もあるのですね。早稲田や慶應が2004年に入ったとか、新設大学が増えているせいもあるんですけども、ただ、大学あたりの量も増えていますので、こんな風にきれいに下がっているという結果が出ています。先ほどHolderさんがおっしゃったように、日本の場合にはビッグディールでこうきれいに下がっちゃうというのは、SFXのようなリンクサービスがほとんど導入されていない。それによってそのファインダビリティが向上するようなことが生じないと言うのか、その問題があると思います。それからもう一つは、先ほどから我々で話していたんですけども、ユーザ・イニシエイトなILLが日本の場合にはほとんどなされていないという事実があるのです。

〈土屋〉

これが実際に日本で実際に起こっていることで、外国雑誌へのILLの依頼が減少しています。Holderさんが講演の中でしめされたのと同じような要因で、国内雑誌へのリクエストが増えている。人々は、利用可能な情報について、ますます多くを知ろうとしている訳です。

〈Holder〉研究の結果として、日本語の雑誌がますます利用可能になったということではありませんか？

〈土屋〉

でも電子的ではないのです。電子化されたものもたくさんあるんですが、どこにあるんだかよくわからない。ある論文が引用されていて、論文の存在が判明して、書名などが示されていて、それがILLのリクエストにつながっているのではないかと思います。

Q:〈Holder〉おそらく早稲田大学でも、古典が電子化されるともっと読まれるのではないのでしょうか？

A:〈今村〉私どもの大学で言いますと、早稲田大学にしか無いようなものをまず電子化していくというような、特徴のあるものを電子化していくことでより使われるようになるということは当然あると思います。

〈土屋〉

今日のお話だと、デジタル、Scholars Portalの色々なパーツと早稲田大学がお使いのパーツはだいたい同じで、ERMを中心に、統合検索とリンクリゾルバ、電子コンテンツマネージメントと権利管理とかだいたいそんな感じですね。後はリポジトリがあるかもしれない。国立大学ではリンクリゾルバとかを一生懸命使っている大学が出始めたところです。

Q: 蔵書のデジタル化ということで、オープンコンテンツアライアンスとか、Googleブックサーチのデジタル化プロジェクトに対する、トロント大学を中心としたカナダの大学のスタンスを教えてください。

A:〈Holder〉トロント大学はオープンコンテンツアライアンスの一員ですし、インターネットアーカイブについても協力する立場にあるので現在作業を進めています。現在、図書館に20台のマシンが置いてあって、電子化を順次進めているという状況です。現在のところ、著作権の期限が切れたもの、あるいは出版社が著作権の期間内であるけれども許可を与えたものについては電子化を進めています。現在のところ、計画としては早稲田大学ほど大規模にやる予定は無いのですが、おそらく10万冊ほどデジタル化することになっていまして、デジタル化できましたら、インターネットアーカイブ、あるいは、マイクロソフトのアカデミックサーチでしたか、これを介して無償で公開していくということになっています。私として楽しみにしているのは、デジタル化が終わった段階で、トロント大学ではそのコンテンツをマイアイライブラリの一部にします。その他のものを含めまして、非常に包括的な検索ができるようになるという点です。土屋先生とある会議に参加する予定があるのですが、その会議にはミシガン大学のマーク・サンダースさんもいらっしゃるということになっています。彼がGoogleプリントについて話をするんですけれども、私の方からオープンコンテンツアライアンスについて話をするということにもなっています。

Q: 10万冊というのは、多いのですか、少ないのでしょうか。

A:〈Holder〉私としては少なすぎと思っています。今申し上げた10万冊というのはトロント大学の分だけです。その他にオープンコンテンツアライアンスのメンバーになっている大学や諸機関でも随時電子化を進めていくでしょうから、トータルでどのぐらいが電子化されるのかについては実は私は存じ上げていないのですが、ご存じでしょうか？

〈土屋〉

Googleとオープンコンテンツアライアンスで同じタイトルを電子化していないのでしょうか？

〈Holder〉

そうじゃないといいんですけど、ただそのことに関連して図書館としてきちんと注意を払っておかなければいけないこととして、出版社の中にはJSTORと問題をおこしているケールがあるということです。というのも、JSTORがすでにバックファイルを電子化して提供している部分についても出版社がアクセスを提供しようとしているからです。JSTORが既にデジタル化したものなのに、出版元も電子化を進めようとする状況というのが確かにあります。それはお金の無駄になってしまうだけです。

Q: 研究者コミュニティへのサポートということで、プレゼンテーションの中でRefShareについて言及があったと思うのですが、具体的に研究者コミュニティをサポートしたり、それから研究者の間で情報やアイデアをシェアするための仕組みをサポートするということに関して、もう少し詳しくアイデアをお話し頂けませんか。

A: 〈Holder〉これについてはまだ始まっていません。いずれにしても根本となるアイデアとしては、サーバの中であるスペースを提供してその中でさまざまな共同研究を行って欲しいということです。日本の場合はどうか分かりませんが、少なくともオンタリオ州では、複数の大学、複数の教員を関与させたプロジェクトの方が政府の予算を得やすいという事情があるので、細かいところについてはまだ検討中ではあるのですが、何らかの形で複数の教員が情報を共有できるようなスペースを提供していきたいと考えています。おそらく機関リポジトリのような形になるのではないかと思います。早期の段階のワーキングペーパーと一緒に見てもらうとか、あるいは同じような分野の研究をしている人と情報を共有するだとか、そういう使い方が考えられるのではないかと思います。

Q: ユーザーズパネルの反応を調査して、それによって意志決定をしていく、あるいはプランニングをしていくことをおっしゃっていましたが、具体的に反応を収集するツールと、それからそれをどのように意思決定のプロセスに反映されているか、各大学でどのように計画に反映するような体制を取っているかについてご紹介いただけますか。

A: 〈Holder〉お答えする過程で、自分がトラブルになってしまうというまずい状況になってしまうのではないかなと思うのですが、先ほど言及のあった調査については確かにマインズを使いました。Scholars Portalに入る前に、確か1時間あたり10分間と時間を区切ってその時間帯はScholars Portalに入ってくる人は誰でも、最初に質問票に記入しなければScholars Portalに入れないという時間を設けたと思います。実際にどのように計画に反映していくかということについては、やはりどの図書館にもそれぞれ伝統あると思うんですけども、自分達がやっていることについて好意的な評価が得られない場合は無視してしまうということが多いと思うんですね。それゆえユーザーパネルという方法を使って、このような調査を何度もしていけば、一貫して出てくるコメントについてはそれにきちんと耳を傾けて対応するという文化を醸成できるのではないかなと思っています。

Q: こういう仕事をしていらして出版社とかシステム提供者との間で、どうしても妥協できない、合意できないっていうことを経験したことがおありでしょうか。

A: 〈Holder〉今までに何度もそういうことはありまして、どういうことだったかと事例をご紹介できればと思って考えていたのですが、確かに、結局合意に至らないということは何度もありました。その場合はただ単にその案件は断るということです。

〈土屋〉

短い時間でしたけれども、有意義な交流ができたと思います。Wallen Holder さん、今村さん、それから素晴らしい通訳をしていただいた熊野さんに感謝したいと思います。